

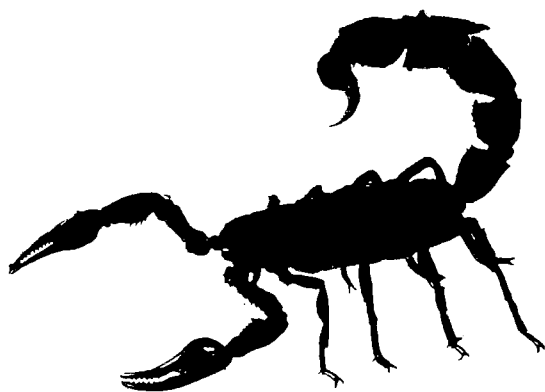
三好徹

最後の狙撃者

双葉社

三好
徹

最後の狙撃者



双葉社

最後の狙撃者

著者 三好 徹

発行者 井上 功夫

発行所 株式会社双葉社

東京都新宿区東五軒町三―二八 千一六二

電話 (〇三) 五二六一―四八一八 (営業)

(〇三) 五二六一―四八三三 (編集)

振替 〇〇一八〇―六一―二七二九九

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

落丁・乱丁の場合は本社にてお取りかえします。

定価・発行日はカバーに表示してあります。

目次

第一章	奇妙な予告	5
第二章	ハンター	45
第三章	静かなる男	78
第四章	砂漠のサソリ	124
第五章	行動する男	156
第六章	作戦開始	201
第七章	逆襲	243
第八章	罠 わな	276
第九章	最後の一弾	323

装画·装帧／森隆一

最後の狙撃者

第一章 奇妙な予告

1

内閣官房長官の小寺正明は、そのとき執務室に入ってきた首席秘書官の宮前のこわばった表情を一瞥して、何か良くない知らせが入ったことを直感した。

小寺は十分ほど前から財界総理といわれている岩垣会長や石油業界のリーダーの森谷副会長ら三人の経済人と会っているさいちゅうだった。約束の時間は午後二時からになっていたが、小寺の方はその直前の打ち合わせの会合がのびたために、じつさいに会見がはじまったのは二時十五分だった。当初の予定では、会見時間は三十分間で、そのあと小寺は官邸を出て別の会合に、首相の代理として出席し、一場の挨拶をすることになっていた。しかし、日本の経済界を代表する岩垣らを相手に、次の予定があるからといって追い出すわけにはいかなかった。会見が十五分も遅れたのは、もっぱら小寺の側の都合なのである。

小寺は岩垣らに、ちよつと失礼、とことわつてから、

「何か用かね？」

と宮前に声をかけた。

「はア……じつはお宅から電話が入っておりますが……」

と宮前は緊張した声でいった。

「うむ」

小寺は低く声を出した。お宅から電話、というのは、本当に彼の家族からのものではなかった。宮前との間に決めてある暗号のようなもので、緊急に処理しなければならぬ情報が入った、という意味であった。しかし、岩垣らとの話合いは、まだ十分しか経過しておらず、それも本題に入る前の世間咄の域を脱していなかった。といつても、かれらが何のために小寺を訪問してくるのかは、前もってわかっていた。一言でいえば陳情であるが、これまでのしきたりとして、顔を合わせていきなり本題に入ることはなかった。むしろ最後の十分間にその話が語られ、どうかよろしくご配慮を、ということになる。

「ちよっとお出になりますか」

と宮前がいった。これは、とりあえず席をはずせ、という意味である。すると、

「小寺さん、どうかご遠慮なく。あなたの愛妻家ぶりは有名ですからな」

と森谷がいった。官僚出身で、石油会社に天下りし、社長、会長をすでに二十年もつとめている人物である。元首相の広沢とは官僚時代からのつきあいで、広沢はすでに引退しているが、いまでもつて月に一、二度はゴルフをしているという話だった。しかし、小寺が会ったのは、この日が初めてだった。

「では、失礼して」

と小寺は頭を下げ、席を立てて執務室の奥にある小部屋に入った。

宮前はドアをしめると、

「なるべく早く、あのご老人たちに帰っていただきたいのですが……」

「それはぼくだって同じ思いだが、あまり礼を失することはできませんよ。用件は何かね？」

「内調の河原室長からの極秘情報です。中東やインドネシアへ出す政府特使を誘拐しようとするテロリスト集団がいるというんです」

と宮前はいやに落ち着いた口調でいった。宮前は警察出身で、こういうときは、自分に冷静であれといひ聞かせるらしく、そういう口調になる。いいかえれば、それは内心ではひじょうに昂ぶっていることを逆に証明しているようなものだった。

「政府特使を誘拐する？」

と小寺はくりかえした。事の真偽を確かめるというよりは、自分自身を納得させるための時間かせぎというべきかもしれない。事おきなかった。

「そうです。にわかには信じ難い情報ですが、河原室長がじかに連絡してきたことからしますと、放つてはおけないように思います」

「テロリスト集団というが、どこの組織なんだ？」

「くわしいことは聞いておりません。はじめは、室長が取急ぎお目にかかってお耳に入れたいことがあるというので、いま財界のお歴々と会見中だし、そのあとも予定がある、とわたしが答えますと、とりあえず、これだけを申し上げてくれ、といひまして、いまいったようなことを彼は申したわけです」

「ほかには？」

「それだけです。折返し連絡するから待機してくれ、といひてありますが……」

「わかった。とりあえず、河原君にきてもらってくれ。こちらまでできる限り早く帰ってもらうようにするが、そのあとの予定はどうする？ 総理がキャンセルしたから、ぼくが代理をつとめることになったんだ。それをまたキャンセルするわけにはいかんだろう」

「その対策を考えるためにも、ご老人連中にお引取りいただくことには……」

「その情報は、総理には連絡したのか」

「まだです。連絡すべきか否かについても、お考えいただく必要がありますし、その時間も欲しいのですが……」

「五分で帰ってもらうよ」

小寺はそういつて執務室に戻り、

「どうも失礼しました」

と岩垣らに頭を下げた。

森谷は葉巻を口からはなすと、

「いまも岩垣会長と話しとったんだが、若い方は羨ましい限りですな。わしらの年齢になると、女房なんていうのは古ぼけた蓄音器と同じようなもんでしてね」

「チクオンキ？」

「そうです。蓄音器ですよ。おや、ご存知ありませんか。やはりお若いですな。古くなると雑音を出すばかりで、うるさいだけという意味でしてね」

「森谷さん、蓄音器などというようではお年が知れますよ。いまの若い人にはレコードプレーヤーではないと通じません」

と鉄鋼メーカーの会長の田尻がたしなめた。

小寺は内心ではうんざりしていた。レコードプレーヤーでさえ、もはや一部の好事家のもので、いまの若者はCDプレーヤーが大半なのである。それより、こうした無駄話に時間を費すことに、彼はやはり焦躁感を抱いていた。

「岩垣会長をはじめ、お忙しい皆さん方にわざわざお越しいただきましたのに、こちらの都合で時間に遅れまして、どうも恐縮しておりますが、じつはこのあと総理の代理をつとめなければならぬ公用

が入りまして……」

と小寺は切り出した。

森谷は悠然と葉巻をふかし、

「いやいや、あなたがお忙しいのは、ようわかつております。きょう、岩垣会長をはじめわしらが参上したのは、来月の日米経済協議のことですよ。先週も通産大臣にお目にかかつていろいろと申し上げたんだが、こういう問題は結局のところ官邸主導であると……」

「お申し入れの趣旨は通産大臣からうかがいましたし、総理にも話してあります」

「それなら善処していただけるもの、と期待してよろしいわけですね」

「総理は関係大臣とよく相談してから、と申されていました」

「なるほど。じつは、昨日ですが、憲政党の川井総裁にお会いしましてね、同じ趣旨のことをお話しただが、川井さんは近いうちに外遊するとかで、帰国したら、わたしどもの要望の線に沿って政府にもアメリカにも働きかけて下さる、と約束してくれましたね」

とこんどは田尻が口を出した。

憲政党はいまは下野しているが、長期間にわたって日本の政治を支配してきた政党である。その影響力はいまもって財界官界に根強く残っている。その最大の理由は、次の総選挙では過半数の議席を獲得し、再び政権を握るだろうと見るものが多いからである。

田尻の発言は、裏を返していえば、自分たちの陳情が現内閣によって無視されるなら、次の総選挙では憲政党に肩入れするぞ、という一種の恫喝なのである。

小寺は応じた。

「川井さんにお会いになったんですか。それで、彼は近いうちに外遊する、といったわけですね」
「おや、ご存知なかったんですか」

「もちろん、聞いておりますよ。モサンビークに派遣されている自衛隊を視察したのち、中東などの産油国を友好訪問するそうですね。ちょうど同じ時期に、政府も特使を中東やインドネシアへ出す計画がありまして、何といたしますか、それと競合する形になるものですから、正直にいいますと、ちと困っているんです」

すると、森谷がいった。

「別に困ることもないでしょう。政府を代表する特使と違って、川井さんには何も権限はないわけだから。いまおっしゃったように、単なる友好訪問ですからな」

「それは、ま、そうですが……いずれにしても、お申し越しの件につきましては、わたしからも総理へよく申しておきます」

「ひとつ、くれぐれもよろしく」

と岩垣が莊重にいった。

小寺は執務室のドアの外まで岩垣らを見送った。

すぐに宮前が入ってきた。

「爺さん連中、手に負えませんね」

「まアね」

小寺は椅子に戻って、冷えた茶を一口すすつてから、

「河原君はきているかね？」

「さっきから待っております」

「車の中で話を聞くことにしようか」

「そういったのですが、運転手に聞かえてはまずいし、車に長官と内調の室長がいつしよに乗つているところを、新聞記者に見られたらそれも都合が悪いのではないか、と彼は申しております」

「うむ」

小寺は短く唸るように呟いて腕時計を見た。官邸から新宿にあるホテルまで、パトカーに先導させるにしても、ぎりぎりの時間だった。そのホテルで開催される会議で、小寺は城戸重則総理大臣の代理として挨拶しなければならなかった。

「総理の方は？」

と彼は宮前にたずねた。

この日、城戸は軽井沢へ行っており、アメリカ大使のカーナーと会談することになっていた。ただし、その前に二人でゴルフを楽しみ、そのあとで食事を共にしながら意見を交換しようというのである。

「予定より少し遅れて十二時三十分にはスタートしたそうです。ホールアウトするのは、たぶん四時半ごろでしょう」

「報道陣に悟られずに、ホールアウトする前に連絡がとれるか」

「とれるでしょう。コース内には記者たちを入れないようにしてありますから」

「ともかく新宿へは行くしかあるまい。いっしょに行くのは伊田君だ。きみは残って、新宿のホテルに部屋をとってくれ。わたしは、挨拶が終ったあと、気分が悪くなったことにして休む。河原君には、わたしが部屋に入る前に入っていてもらう」

伊田は第二秘書官である。

「承知しました」

宮前はきびきびした足どりで執務室を出て行った。

小寺はふつと溜め息をついた。どうしてこういうことになったのか、よくわからない。はっきりしているのは、ひどく厄介な事態が起こりつつあるということだけだった。

政府特使の派遣は先週の閣議で決定され、その人選は、小寺と外相の畑山、通産相の曾根の三人の協議にゆだねられた。候補者は数人いたが、最終的には二人にしばられた。一人は畑山の推す井野達男、もう一人は曾根の推す三条健彦だった。井野は外務省出身で国連大使をつとめたこともあり、その外交手腕には定評があった。年齢も六十歳をこえており、いまは外郭団体の最高顧問をつとめている。一方の三条はまだ四十代の半ばという年齢であるが、すでに当選四回の議員で、通産政務次官をつとめている。単純にキャリアの比較でいえば、井野を選ぶ方が無難だったが、三条には、井野にない特色があった。父親の急死で議員を継ぐ前、海外青年協力隊の一員として中東で働き、アラブ語を自由にあやつれることだった。

また、選定にさいして、表向きは論議の対象となることはなかったが、三条は城戸首相の遠縁であり、かつまたさる宮家の外戚でもあった。絶対王制の産油国では、こうしたことも有利に作用するだろうと思われた。

畑山と曾根との話合いはまとまらず、決定は小寺にゆだねられた形だった。小寺としては、どちらでもよかった。二人が一致してくれれば、そのまま承認するつもりだった。彼の考えで決まることは、かえって迷惑だったのだ。もともと官房長官というのは、内閣の潤滑油であり調整役なのである。どちらを採っても、しこりが残ってしまう。推薦を退けられた方は、面子をつぶされたように感ずるのだ。

悩みのタネはそれだけではなかった。城戸政権は三派の連立によってかろうじて過半数を得ている。その三派とは、城戸や小寺の民主クラブと、畑山の属している民生党、曾根の属している改進黨

である。いいかえれば、畑山と曾根の対立は、民生党と改進黨の対立でもあった。もし小寺が井野を特使に選べば民生党の肩をもったことになり、三条を選べば改進黨の顔を立てたことになる。どちらにしても、退けられた方が不快感を抱くことは明らかつた。

小寺は考えた末に城戸に相談した。

「わたしとしてはどちらでも立派に特使はつとまると思っているんですが、両大臣ともなかなか強硬で困りました。ここはひとつ、総理に決めていただくしかないかと……」

「わたしもどちらでも構いません」

と城戸はそくぎにいった。彼は誰にでもそういう丁寧な口のきき方をするのだが、言外に、決めるのはきみですよ、という意味をこめてゐる。小寺は苦笑する思いで、

「どうも弱りました。いつそのこと両大臣にジャンケンか籤くじを引いてもらつて決めようかなんて、バカなことまで考えましたよ。しかし、重大な外交案件をそんなことで決めたとわかつたら大変なことになりますからね」

「それはそうです。でも、わたしと長官の二人だけの秘密ならばいいじゃありませんか」

と城戸は事もなげにいった。

「といますと？」

「コインを投げて、表なら外務大臣、裏なら通産大臣……というのもおもしろいかもしれませんよ。ここには、われわれ二人しかいないわけだから、洩れる心配はありません。また、どちらが選ばれるにせよ、それなりの理由づけはできるはずでしょうから」

と城戸はにこにこしていった。

本気なのか冗談なのか、その表情からはわからなかつた。それを質問するわけにもいかなかつた。また、質問しても無駄だろう。おそらく城戸は、深遠な謎めいた微笑をうかべるだけで、はつきりい

わなはずである。この人物にはそういうところがあるのだ。

小寺はポケットをまさぐり、一枚のコインをつかみ出した。

城戸は黙って見ている。

小寺はコインを掌にのせた。城戸はいぜんとして無言である。小寺はコインをしまいこんだ。出しただけで、コインを投げる気はなかった。ある意味では、城戸の反応を試してみたかったのだ。

小寺は意を決していった。

「ここは通産大臣の顔を立てようと思いますが、どうでしょうか」

城戸は微笑をうかべた。

「結構です。じつは昨日ですが、山藤さんから電話がありましたね」

山藤というのは改進黨の幹事長である。入閣はしていないが、連立与黨の要となっている実力者だった。ただし、小寺は個人的にはこの人物に好意をもっていない。

「で、何か……」

「表向きの用件は、秘書に任せていいようなことでしたよ。わたしが入っている神奈川のゴルフクラブに入会したので、推薦人になってもらえないか、という話でしたから。もちろん、ことわる理由もないので承知したわけですが、そのあと最後に、特使は決定したかどうかとさりげなくいいましたね、まだのようだと答えると、いろいろ大変ですな、とだけ切って電話を切りました」

「要するに、気にしていた、ということですね」

と小寺がいうと、城戸は否定も肯定もせず、

「そのことを話さなかったのは、決定に変な影響をあたえたくないと考えましてね。しかし、結果を聞けば彼は満足するかもしれません」

「もしかすると、総理のお考え以上に彼の電話は重大な意味があったかもしれません」